

平成21年 4月 1日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18500575
 研究課題名 (和文) 特別支援教育を成功させるための家庭科学習プログラムの開発
 —家庭との連携による—
 研究課題名 (英文) Development of nutrition education in Homemaking for making a go
 of Special Support Education -focus on parents' cooperation-
 研究代表者
 伊藤 圭子 (ITO KEIKO)
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：50184651

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：家庭科学習プログラム 特別支援教育 家庭科と家庭との連携

1. 研究計画の概要

本研究は、障害児も非障害児も共に学習効果が高まる家庭科学習プログラムを開発することを目的とする。本研究は次の手順で進める。

(1) ①家庭科が教科として存在しインクルージョンの先進的取り組みを行っているフィンランドの実状を検討し、プログラム開発の示唆を得る。

②応用行動分析学の理論を適用して、家庭と連携した新しい家庭科学習プログラムを開発する。

(2)開発した家庭科学習プログラムを授業実践することによって、そのプログラムの有効性を実証的に検証する。

2. 研究の進捗状況

(1) ①特別支援教育における新たな家庭科学習プログラムを開発する際の示唆を得るため、統合教育における授業実践の蓄積があるフィンランドの家庭科教育の実状を視察し、特別支援教育 (インクルージョン) の先進的取り組みを行っている研究者、家庭科教師および学校を選定し、インタビュー調査と授業実践の参観・記録を実施した。

② ①の結果をふまえた上で、応用行動分析学の理論をもとに5つの支援ツール (家庭科だより・保護者会、食品カード、食事チェック表、教師・保護者からのコメント、食事ポイントポスター) を設定し、学校の授業場面だけでなく家庭で保護者にも学習内容に関する働きかけを行ってもらうことで、学習効果が維持されることをねらいとした家庭科

学習プログラムを開発した。(2)開発した家庭科学習プログラムを、2008年11月下旬～12月中旬に授業実践を行った。

現在は授業実践結果を分析し、2009年6月に開催される日本家庭科教育学会において研究発表する予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由)

家庭科学習プログラムを開発するため、本研究の1年目に情報収集、資料収集などを行い、2年目に特別支援教育を成功させるための家庭と連携したプログラムの枠組みを検討し、3年目で授業開発を行い、それを実践することによって、検証するという当初の研究計画に従って進展している。

4. 今後の研究の推進方策

現在は、昨年度に家庭科学習プログラムを開発し授業実践した結果を分析しているところである。その結果、授業終了直後は学習成果がみられても、授業後において**保護者の介入**があったにもかかわらず、長期間の維持が困難な子どもがみられた。このことから、本年は最終年ではあるが、開発した家庭科学習プログラムを修正した上で、再度授業実践を実施し、さらに学習成果の維持が期待できるプログラムとなるように開発したいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

岡田恵子・伊藤圭子、小学校家庭科における「代表例教授法」を用いた調理実習授業日本家庭科教育学会誌、査読有、51・1、2008、28-37

〔学会発表〕(計 1件)

伊藤圭子・福田公子、フィンランドに学ぶ家庭科における特別支援教育の方向、日本家庭科教育学会、2007年6月30日、国立オリンピック記念青少年総合センター

〔図書〕(計 1件)

伊藤圭子、風間書房、軽度知的障害児を対象とした栄養教育に関する開発、2009、267